

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 1番 三田市立ひまわり特別支援学校
1年 鈴木 陽菜（すずき ひな）
2年 川崎 悠大（かわさき ゆうだい）

【担当課】 健康福祉部 障害福祉課

【講評者】 市長

【提案事項】 好きな時、好きな所に行ける三田をめざして

【提案内容】

1番 高校生議員 ひまわり特別支援学校高等部1年の鈴木 陽菜、2年の川崎 悠大です。

ひまわり特別支援学校は、富士小学校、富士中学校に併設する形で、それぞれ小学部と中学部・高等部があります。「からだの学習」などの自立活動や教科学習を、友だちや先生たちとともに毎日頑張っています。

私たちは車いすやバギーに乗って移動します。休みの日にちょっと家族と買い物に出かけようと思ったとき、気軽に外出できる環境が少ないと感じています。

今、三田市では、車の後部からスロープを出して車いすごと乗り降りできる福祉車両が駐車できるスペースが少なかったり、外出先で車いすから降りて休憩できる場所が少なかったりしています。

同じように、多目的トイレを使う時、私たち高校生の体のサイズに合うベッドが備え付けられていないこともあります。

また、車いすで移動する時の歩道の幅が狭いと、人と行き交う時にぶつかってしまう怖さを感じることもあります。

電車で移動する時にも車いすやバギーでスムーズに乗れない状況もあります。例えば、事前に何時何分の電車に乗るという連絡を駅員に伝える必要があるため、気軽に乗れるわけではありません。

車いすスペースがある施設でも、屋根がないこともあり、雨の日には出かけることが難しいです。雨風がしのげる駐車スペースがあることや成人サイズの介護ベッド付きのトイレが増えることで、行きたいときに、行きたいところへ行ける自由が生まれます。

また、車いすを自分の力で動かして、好きな所に好きなように移動できるための、十分な幅のある歩道があればうれしいです。

電車の利用については、駅のエレベーターがホームの端にあることが多く、また狭いため、十分に時間的な余裕をもって乗らないといけないことが多いです。

私たちは普段の学校生活でも、車いすやバギーに乗り続けると体が痛くなったり体調が

悪くなったりします。学校では床に敷いたマットに降りて体を横にして休むことができますが、外出先でもそのように体をリラックスさせることができる部屋や空間があると、安心して外出できます。

また、公共施設や商業施設など、私たちが日常生活でよく利用する場所が、車いすやバギーの利用者目線での見直しや改善が進められると嬉しいです。

障害のある人が家にこもらず、気軽に街に出ることができれば、三田に暮らす人々同士のつながりも豊かになり、多様性のある社会の実現に一步近づくのではないのでしょうか。これでひまわり特別支援学校の提案を終わります。ありがとうございました。

【講評内容】

障害のある人もない人も誰もが自由に街に出かけられるまちづくりに、高校生の皆さんが自ら問題意識を持ち、具体的なご提案を示されたことに心から敬意を表します。

ご提案にありました「日常生活でよく利用する場所の利用者目線での見直しや改善」はとても大切な視点であり、公共施設に限らず病院や商業施設などの民間施設におきましても、国の法律や県の条例等により、障害のある人や高齢者など多様な人に配慮した整備が進められています。

しかしながら、議員ご指摘のとおり施設の形状や面積の制約など様々な要因により、利用者の目線に立った整備に至っていない場所があることも認識しております。

障害のある人が安心して気軽に外出できることは、多様性のある社会の実現につながります。そのためには、より一層利用者の目線に立った施設整備を行う必要があり、皆様のご意見をいただきながらハード面のバリアフリー化を図ってまいります。一方で、障害や障害のある人に対する理解を深め、「意識上のバリア」をなくし、周りの人誰もが自然に快くサポートができる、ソフト面での環境づくりも重要です。

市では、令和6年度に策定した「第6次三田市障害者福祉基本計画」において、「思いやり、支えあい、みんなでつくる共生のまち さんだ」を基本理念に掲げ、共生社会の実現に向けた様々な取り組みを進めています。

その一環として、施設のバリアフリー情報を市ホームページに掲載し、情報発信を行うとともに、公共施設の整備などを行う際には、利用者のご意見をお聞きし、反映させることで全ての人が利用しやすいものや環境を生み出そうというユニバーサル社会の実現に努めております。

これからも皆さんのような若い世代のアイデアやご提案をもとに、障害のある人もない人も、誰もが住みやすい共生のまちづくりを推進してまいりますので、ご協力をお願いいたします。

ひまわり特別支援学校の高校生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

ひまわり特別支援学校の補助資料



令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 2番 兵庫県立有馬高等学校
1年 今山 空 (いまやま そら)
1年 安達 市花 (あだち いちか)
1年 岸本 美咲 (きしもと みさき)

【担当課】 子ども・未来部 子ども政策課

【講評者】 市長

【提案事項】 子ども食堂への前向きな理解と知名度向上について

【提案内容】

2番 高校生議員 兵庫県立有馬高等学校1年の今山 空、安達 市花、岸本 美咲です。

私たちは、「子ども食堂への前向きな理解と知名度の向上」について提案いたします。

私たちは今年の四月から、月に一〜二回、地域の子どもの食堂の運営に参加してきました。その中で、地域の中での知名度がまだ十分ではなく、新しい参加者が増えにくい状況があると感じました。訪れる子どもたちの多くが同じ顔ぶれであることから、保護者の皆さんが子ども食堂に対して十分に前向きなイメージを持っていない可能性があると考えました。

「子ども食堂は経済的に困っている人の場所」「自分たちとは関係がない場所」といった誤解が、まだ一部で残っていると思われます。しかし実際には、子ども食堂は誰でも気軽に利用でき、子どもから大人まで交流できる、地域の温かい居場所です。この前向きなイメージが十分に伝わっていないことが、利用の広がりを妨げていると考えました。

そこで私たちは、三田市が子ども食堂の魅力や活動内容を、より積極的に発信していくことを提案します。具体的には、市の広報誌や SNS で子ども食堂の様子や参加者の声を紹介すること、小中学校を通じて家庭に案内を届けること、初めての方でも参加しやすい体験イベントを市と連携して実施することなどが考えられます。また、子育て世代に向けて紹介動画を作成し、分かりやすく前向きなイメージを届けることも効果的だと考えます。

これらの取組によって、「子ども食堂は特別な人のための場所」ではなく、「誰でも安心して参加できる地域の拠点」であるという認識が広がると期待しています。多くの家庭が気軽に利用できるようになれば、子どもたちにとって安心できる居場所づくりにつながり、地域のつながりを深める大きな一歩になると考えます。

以上の理由から、子ども食堂への前向きな理解と知名度の向上に向けた取組を提案いたします。

【講評内容】

有馬高等学校の高校生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

実際に子ども食堂で活動されている皆さんだからこそその貴重な気づきや思いを伝えていただき、感謝しています。市としても、子ども食堂などの地域の居場所を大切に思っており、子どもや保護者にとって、地域に「安心できる居場所」があることは、「三田市が好き」「今後も三田市に住み続けたい」という思いにもつながると考えています。

また、ご提案いただいた、子ども食堂に前向きなイメージを持ってもらえるようなPRは、公益社団法人ACジャパンによるCMも放映されておりますが、子どもの「食堂に参加したい」という思いや、保護者の「食堂に参加したいという子どもの気持ちを後押ししたい」という思いにつながり、非常に効果的であると思います。

例えば、3月27日に三田市総合福祉保健センターで開催される「子どもまんなかフェスタ」は、子ども食堂が出店する屋台や昔遊び体験などを、誰でも楽しむことができるイベントで、三田市も運営に携わっています。第1回開催となった去年のフェスタでは多くの方に参加いただき、このフェスタがきっかけで、近所の子ども食堂に通うようになった親子や、「子ども食堂への寄附など、何か力になりたい」という市民の方からの問い合わせが増えました。

引き続き、より多くの方々に子ども食堂を知っていただけるよう、力を入れていきたいと思えます。

私たち三田市が、各子ども食堂の活動をサポートするうえで大事にしていることがあります。それは、子ども食堂を運営されている方々によって、目的や思いは様々であるということです。食堂によっては、対象者を限定せず「誰でもどうぞ」と参加者を集め、その中で「何か困りごとを抱えているかもしれない」という子を見つけて見守りをされているところもあれば、対象者を限定して、限られた人数の中で、手厚くサポートされている食堂もあります。

このようなことから、各食堂の具体的な活動などを周知する際には、「たくさんの人に来てもらえるように広く周知したい」という声や、「同じ顔ぶれだからこそ子どもが安心して参加できているから、大々的な周知はしなくてもよい」といった、各食堂それぞれの思いを尊重しながら、取り組みを進めることが大事であると思っています。

なお、市では今年度、子ども食堂の活動が継続的なものとなるよう支援する補助金制度を作りました。引き続き、周知・啓発を含め、各子ども食堂の活動を支援していきたいと考えております。

最後になりますが、有馬高等学校のみなさんの活動は、三田市の子どもたちを支えてくださっているとても素晴らしい活動です。ぜひ、実際に運営に携わっている皆さんからも、子ども食堂の楽しさや温かさを積極的に発信していただけると嬉しいです。

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 3番 クラーク記念国際高等学校三田キャンパス
2年 株本 育海（かぶもと いくみ）
2年 濱西 航大（はまにし こうた）

【担当課】 産業振興部 まちのブランド観光課

【講評者】 市長

【提案事項】 マスコットキャラクターを活かして三田の魅力をもっとアピールしよう！

【提案内容】

3番 高校生議員 クラーク記念国際高等学校三田キャンパス2年の株本 育海と濱西航大です。

私たちは「マスコットキャラクターを活かして三田の魅力をもっとアピールしよう」について提案いたします。

私たちは三田市の魅力を多くの人に知ってもらいたいという想いと三田市のマスコットキャラクターの認知度が低いままではもったいないという気持ちから、三田のマスコットキャラクターを活かして、観光スポットやイベントをさらに盛り上げていくことができるのではないかと考えています。

まず、三田市の人口推移を見ると、2011年の11万5千人をピークに徐々に人口減少が進んできており、この先も人口減少が続いていくと予想されています。

また、三田市の居留意向の調査結果では、「今後も住みつづけたい」と答えた人が多い一方で、「市外に移りたい」「今のところ分からない」という意向を示した人が特に10代・20代で多くみられるということが分かります。

これらのことから「このまちに住み続けたい、また戻りたいと思えるまち」にするために、何ができるかを考えていくなかで、まずは若者をターゲットにできることを探しました。それがマスコットキャラクターの活用です。

三田市のマスコットキャラクターはキッピー・ハッピー・チャッピーの3体ですが、三田市に住んでいる人でも知らない人が多く、三田市外の人ではなおさら認知度が低くなっています。またキッピーたちのイベントなどへの露出度が低い印象があります。

現に、私たちは地域のイベント、さんだサイエンスフェスティバルや高次ふるさと祭りなどにスタッフとして参加することもあります。その中でもキッピーたちが登場するなどの機会はありませんでした。このことからせっかく魅力的なキャラクターたちがいるのに十分に活かしきれていないのではないかと考えました。そこで私たちは課題解決に向けて2つの提案をいたします。

1つ目は、三田市や企業、農業・畜産業の方々とコラボして新たなキャラクターグッズやイベントを企画し、三田市の特産品などをアピールする場面でマスコットキャラクターを活用すること。

2つ目は、高校生ボランティアを立ち上げ、私たち高校生がマスコットキャラクターに扮して観光スポットや様々なイベントに参加して盛り上げ、その様子を SNS や HP で発信すること。

この2つの提案が実現することによって、マスコットキャラクターという「顔」を活用し、三田の魅力を最大限に引き出し、高校生など若い世代が中心となって活躍できるだけでなく、イベントを通して老若男女が世代を超えて交流できるような街になると考えています。

私たち高校生など若い世代がマスコットキャラクターをきっかけに市の魅力や政策に触れることで将来まちを支える一員になれると考えました。そうすることで、このまちに住み続けたい、また戻りたいと思えるまちにしていくというテーマにもつながると思います。

【講評内容】

お二人の提案は、三田市の現状を丁寧に分析し、そこから「若い世代が三田の魅力をどう発信できるか」を真剣に考えていただいた、大変素晴らしい内容だと思います。特に、人口減少や10代・20代の居住意向の課題に真正面から向き合い、「このまちに住み続けたい、また戻りたいと思えるまち」にするために、高校生自身が役割を果たそうとする姿勢に、頼もしさを感じました。

三田のマスコットキャラクターであるキッピー・ハッピー・チャッピーは、家族の物語を持つユニークな存在であり、まちの魅力を象徴できる大きな資源です。しかしご指摘のとおり、その認知度や露出度にはまだ伸ばす余地があり、活用の幅を広げることは本市にとっても大切なテーマです。

1つ目の「企業や農業・畜産業の方々とのコラボ」の提案は、シティプロモーションの観点からも非常に意義深く、可能性に満ちたアイデアだと感じています。特に、高校生が主体的に企業や農業・畜産業者の方々に働きかけていけば、若い世代ならではの情熱や斬新な発想が直接伝わり、より実りある連携が実現する可能性が高まると思います。高校生からの呼びかけは、大人の視点とは異なる新鮮でユニークな影響力を持っており、色々な人を巻き込んだ新たな動きにつながるきっかけとなることを期待しています。市としても、そうした動きを後押しできるよう、企業・農業者とのマッチングなど最大限協力してまいります。

また2つ目の「高校生ボランティアが着ぐるみに入り、イベントや観光スポットを盛り上げ、その様子を SNS で発信する」という提案も、高校生ならではの強みが存分に発揮される取り組みだと思います。若い世代の視点でキャラクターの魅力を伝えることで、これまで届かなかつた層にも効果的にアプローチでき、キャラクターの可能性を大きく広げるものだと期待しています。

お二人からのご提案は、特に若い世代に「このまちで暮らし続けたい」と思ってもらえる重要な取り組みになると確信しています。

また、移住の視点からも、進学や就職で一度三田から離れてしまった方に向けて、マスコットキャラクターを通じてまちを思い出し、まちに愛着を感じるものになり、キッピーファミリーを見て「また三田に帰ってきたい」と思えるきっかけになるものと考えます。とても大きなポテンシャルを秘めた、とても素晴らしい提案だと感じました。

若者をターゲットとするためには、高校生が提案されること自体にも意義があります。市は、イベント開催や SNS 発信など、それを実現できる手法やつながりを持っています。「三田に住み続けたい」「一度出て行ってもまた帰ってきたい」と思ってもらえるまちになるよう、ぜひ一緒に三田の未来を創っていきましょう。

今後、市といたしましても、様々なイベントでマスコットキャラクターが主役となる場面を増やし、市民や観光客が触れ合える機会を創出することで本市の魅力向上に努めてまいります。

提案①

三田市や企業、農業・畜産業の方々とコラボして、新たなキャラクターグッズやイベントの企画し、三田市の特産品などをアピールする場面でマスコットキャラクターを活用する。



提案②

高校生ボランティアを立ち上げ、高校生がマスコットキャラクターに扮して観光スポットや様々なイベントに参加し、その様子をSNSで発信する。



高校生の目線で発信
三田市の魅力・キッピーたちの
認知度向上につながる！



令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 4番 兵庫県立三田祥雲館高等学校
2年 岩坪 大輔（いわつぼ だいすけ）
2年 内村 鷺己（うちむら じゅき）
2年 押場 悠生（おしば ゆう）

【担当課】 健康福祉部 人権共生推進課

【講評者】 市長

【提案事項】 グローバル化に対応したまちづくり

【提案内容】

4番 高校生議員 兵庫県立三田祥雲館高等学校 2年の岩坪 大輔、内村 鷺己、押場 悠生です。

私たちからはグローバル化に対応したまちづくりについて提案します。近年、日本で就労・定住する外国人の数が増加しています。日本においては一層グローバル化が進むため、今後も外国人労働者が増加していくと考えられます。

実際に三田市では令和2年の外国人の人口は1,000人強だったのに対し令和7年では約1,700人と急増しています。そこで、私たちは外国人労働者に注目しました。経済・財政の観点からいえば、外国人労働者に三田市に来てもらい、三田市で働いてもらうことで住民税等の税収を少しでも上げることができると同時に、労働力を確保することができ、地方企業の活性化につながると考えたからです。しかし、三田市民の観点からいえば、外国の方も含めて住民が住みやすいまちづくりをしていくことが、ゆくゆくは三田市全体にとってより重要だと考えました。そこから、三田市が外国人の方を含めて多様な人々にとって住みやすいまちになればいいなと考えています。

今の三田市には大きく分けて2つの課題があると考えています。

一つ目は、現在三田市で行われている施策が外国の方には十分に浸透していない可能性があるということです。例えば三田市では防災訓練というイベントがあります。これは災害に対する意識が高い人には効果があると思いますが、そもそも防災意識がほとんど無い国（大災害が起きにくい国）出身の外国の方は防災という概念を持っていない可能性があり、訓練の必要性を実感していないかもしれません。このような場合には施策を行っても外国の方にはその重要性や必要性が十分には伝わっていないことがあると考えられます。そのため、施策を効果的に周知する方法が必要だと考えられます。

2つ目は、文化、習慣、言語が違うことに対して、その違いによるトラブルを減らす手立てと違いを生かす手立てが十分に取られているかということです。トラブルについては、例えば母語が異なることによる言語の壁が問題となっています。日常会話がしにくいというコミュニケーションの問題だけでなく、例えば、何かの契約を結ぶときに、契約内容を十分に理解できていないことがトラブルにつながる事例が全国においては発生しています。

医療や住居など重要性の高い場面では通訳サービス等の利用も考えられますが、日常のちょっとした場面で支援できる体制があれば良いのではないかと考えます。

一方、違いを活かす手立てについては、異なる文化圏の人たちが共に生きていくためには、相手の価値観や習慣についての十分な知識と理解が求められます。これは日本の方も外国の方も双方の文化を認め合い、受け入れることが求められます。このことから、住民が互いを尊重しあう姿勢をまずは身につけることが重要だと考えます。

これらの課題を踏まえ、私たちは次のような解決策を提案します。まず、外国の方との交流イベントをさらに増やし、より多くの地域住民と外国の方に参加してもらうことです。Friendship day in Sanda も非常に活気のある素晴らしいイベントだと考えますが、自治会単位の祭りや防災訓練なども、多文化交流のイベントと考えられます。このような交流イベントを通して自国の文化を共有することでお互いの文化、習慣の相互理解を深めることができると考えます。また、イベントを通して外国の方たちに三田市の施策や行政サービスを広めるとともに、外国の方たちも一体となった地域のつながりが広がることで、ともに支え合える社会になると考えます。

また、文化、習慣、言語の違いを解決するためには日常の相談員のような人を雇用主と三田市が連携して配置することがよいと考えました。制度化することで「困ったときにはこの人」という頼りになる存在がいることになり、外国人労働者を雇用する企業側にとっても、外国人にとっても、また地域の人々にとっても安心する仕組みとなると考えます。

以上のことを実現することで、外国の方も含めた多様化する社会において、住民がお互いを深く理解し、ともに助け合えるような共生社会を作っていくのではないかと考えます。また、私たち若者も交流イベントの運営を手伝うといった形でまちづくりに貢献することができ、世代を超えたまちづくりができると考えています。

以上より私たちはグローバル化に対応したまちづくりについて、提案させていただきます。

【講評内容】

このたびの提案、大変素晴らしい内容だと思います。外国人市民の増加に伴う課題に対して、高校生の皆さんが自ら問題意識を持ち、具体的な解決策を示されたことに心から敬意を表します。

市においても外国人向けの相談窓口である「国際交流プラザ」を設置し、外国人が三田市で暮らしていく上で直面する困りごとの生活支援や相談業務を行っています。また、各種地域日本語教室を開催するほか、多言語版の情報誌「ニュースレター」を発行し、生活に必要な情報の提供も行っております。

ご提案いただいたイベントを通じた交流は、お互いの文化や価値観を理解し合うために非常に有効な手段です。また、相談員を配置することで生活上の困り事や行政サービスへのアクセスを支援することは、外国人市民の方々が安心して暮らせる環境づくりに繋がります。

本市では、共生社会の実現をめざして多文化共生の取組みを進めていますが、少子高齢化の進展に伴う地域コミュニティの希薄化等を背景として、その実現には様々な困難が伴います。そこで、外国人市民を、ともに地域課題を解決するパートナーとして迎え入れることにより地域コミュニティの活性化を進め、ひいては多文化共生、共生社会の実現につなげていきたいと考えます。是非、皆さんも、住んでいる地域に目を向けることや、本市の国際交流プラザで実施している生活相談や、日本語教室のことを多くの方々に広めていただくとともに、様々な交流イベントに参加するなど、相互理解につながる機会を増やしていただきたいと思えます。

これからも、具体的な方法や実行の手法を検討してまいります。高校生の皆さんがこのような視点を持ち、未来に向けて提案をしてくださったことに心から感謝申し上げます。私たちも、この提案をもとに、誰もが住みやすい共生のまちづくりを推進してまいります。

三田祥雲館高等学校の高校生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 5番 三田松聖高等学校
2年 榎本 隼（えのもと はやと）
2年 北山 耀（きたやま よう）
2年 山野 友誠（やまの ゆうせい）

【担当課】 都市整備部 交通政策課

【講評者】 市長

【提案事項】 相野地区とウッディタウンを結ぶ新しい交通手段

【提案内容】

5番 高校生議員 三田松聖高等学校2年の榎本 隼、北山 耀、山野 友誠です。

私たちからは相野地区とウッディタウンを結ぶ新しい交通手段について提案します。

私たちは相野地区にある三田松聖高等学校に通っています。放課後下校ついでにウッディタウンにあるイオンに買い物に行こうと思ったときに交通手段がなく一旦三田駅を経由してイオンに行くか、あきらめて帰るしかありません。そこで相野地区からウッディタウン方面への交通手段が新たに出来ると便利だと考えました。

現状は交通手段として自家用車・バス・電車がありますが、私たち高校生や免許のない人にとってはバスの便が少ないことまたは三田を経由するという遠回りのルートをとらなければならない不便さがつきまといまいます。もっと手軽に利用できる交通手段としてデマンド交通を提案します。

デマンド交通は利用者の都合に応じて予約をして運行経路やスケジュールを調整する地域公共交通です。バスの本数を増やすには費用対効果で考えると実効性に欠けるため利用者のニーズに合わせて運行できるデマンド交通は利点が多いと思います。少子高齢化で利用客の少ない相野地区ではバスの増便よりもコスト削減できるのではないかと思います。周辺自治体において実証実験が行われています。例として尼崎市では11月から2ヶ月間デマンド交通を導入しています。三田市においてもデマンド交通の導入で交通難民が減り人の移動が活発になることで商業施設の利用者が増え経済効果に好影響をもたらすのではないかと思います。またデマンド交通導入が成功すれば周辺地域への導入にも役立つのではないかと考えています。

以上のことから三田市、相野地区とウッディタウンを結ぶデマンド交通の導入を提案します。

【講評内容】

三田松聖高等学校の高校生議員の皆さん、素晴らしいご提案ありがとうございました。

皆さんが日常の学校生活の中で感じられた「気軽に移動できる交通手段」の必要性についてのご提案は、利用者目線のニーズを捉えつつ、事業としての費用対効果も意識されており、大変高く評価しております。

市も同様の課題感を共有しており、他地区ではありますがデマンド交通を含む新たな交通手段についての実証実験を今年度を実施するなど、まさに皆さんが感じている課題と同じ視点で取組を進めています。

市では、既存の公共交通ネットワークを維持しながら、新たな移動手段を補完的に導入することで、誰もが気軽に移動できるまちづくりを目指しています。ご提案のデマンド交通は、ニーズに応じた柔軟な運行ルートの設定や、予約がある時間帯に運行できる等のメリットがある一方、予約の手間や利用が集中する時間帯は希望通りに乗れない等の課題も抱えています。そのため、新たな移動手段の導入に際しては、利用人数や時間帯、目的地などのニーズ、運行の効率性、コスト面などを総合的に考慮しながら、導入地域の特性に適した形となるよう、その地域で活躍する高校生の皆さまを始め、住民の皆さま等の多様な関係者と一緒に考え判断しながら導入を進めています。

公共交通ネットワークを確保維持するためには、皆様のように、これからの三田を担う若い世代が公共交通に関心を持ち、不便さを実際に感じ、改善のための具体的な提案をしてくださることは、市の政策を進めるうえで、大変貴重な推進力となります。

共に課題を考え、より良い交通体系を築いていく取組の担い手となることを皆さんに期待し、今後のご活躍を心から応援しております。

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 6番 兵庫県立三田西陵高等学校
2年 多田羅 白瑛（たたら はくえい）
1年 梶口 真滉（かじぐち まさひろ）
1年 胸永 龍茉（むねなが りょうま）

【担当課】 産業振興部 農業振興課

【講評者】 市長

【提案事項】 三田市の特産物について

【提案内容】

6番 高校生議員 兵庫県立三田西陵高等学校2年の多田羅 白瑛、1年の梶口 真滉、胸永 龍茉です。

私たちは三田市の特産物について提案させていただきます。

三田市に暮らす私たちにとって、地元の特産物といえば、三田牛や黒大豆、おいしいお米がすぐに浮かびます。誇らしいことであり、自慢できる「三田の顔」だと思っています。

ですが、私たち若い世代にとって、この素晴らしい「宝物」が遠い存在になってしまっている気がします。

三田牛は有名ですが、では黒大豆がどうやって作られているか、米農家さんがどんな苦勞をしているか。私たちはほとんど知りません。今や地元の食文化や農業は、テレビの中の話で、我々若者の生活とは切り離されています。消費行動も、「スーパーで買う」「外食で食べる」という一瞬で終わってしまい、そこから「地域への愛着」が育つことがありません。

このままでは、三田の誇りは、私たち世代で止まってしまいます。市外の人々も、三田の良いところを深く知ることなく通り過ぎてしまうでしょう。私たちはこの「無関心」という名の壁を、なんとかして壊したいのです。

私たちが目指したいのは「〇〇といえば三田！」と誰もが自信をもって言える、強いブランド力を持つまちです。

そして何より、私たち若い世代が、地域の食や文化に触れて「ああ、やっぱり三田ってすごいな」と心から思えるようになること。知識として知るだけでなく、自分の手で触れ、味わい、誇りを感じる。そんなまちこそが、私たちが住み続けたいと思える「希望のまち」だと考えます。

この理想を叶えるために、私たちは2つの提案をします。

まず、五感で感じる「体験」をデザインすることです。単なる収穫体験で終わらせず、農園と調理教室を組み合わせた「収穫&創作チャレンジ」のようなツアーを企画します。自分で収穫した黒大豆を、自分たちでレシピを考えて調理する。このプロセスこそが、特

産物の「物語」を参加者の心に深く刻みつけます。「楽しかった！」という思い出は、必ず「また来たい！」という愛着に変わるはずです。

そして、もう一つが「学生ブランドの立ち上げ」です。中学生や高校生が特産物を使ったオリジナルレシピや加工品を考案して販売しますが、それだけではありません。私たちはそこに、例えば「ティラノザウルスレース」のような、誰もが童心に帰って、見て、やって、楽しい参加型イベントを組み合わせます。美味しい「食」と全身で楽しむ「遊び」が融合したお祭りの空間こそが、地域と参加者の心をつなぐ特別な「物語」になると考えます。

企画から運営までを自分たちの手で成し遂げ、まちに賑わいを生み出す経験は、単なる活動を超え、「自分たちの力でまちを面白くできる」という確かな自信と、私たちの将来のキャリアに繋がる、生きた学びになるはずです。

この提案が実現すれば、子育て世代の方々は、子どもたちに誇れる食材と食育の環境に恵まれます。生産者の方々も、私たち若い世代という新しい協力者と出会えます。そして何より、私たち若者は、地域社会に貢献できる場を持ち、このまちで「生き続けたい」という強い希望を持てるようになるでしょう。

私たちは三田の素晴らしい特産物を、私たち若者の愛と柔軟なアイデアで輝かせ、次の世代へとバトンをつないでいきたいと考えます。ご清聴、ありがとうございました。

【講評内容】

これからの三田を担う高校生の皆さんに、三田牛、黒大豆、三田米といった特産品を地域の「宝物」として評価いただき、深い愛着を持っていただいていることを大変頼もしく感じます。

一方で、この「宝物」が遠い存在になりつつあるという現状を感じ取り、「宝物」を生み出す地域の食文化や農業と、若い世代との間に「無関心」という壁が出来つつあるとのご指摘もありました。三田の農畜産物は、盆地特有の寒暖差の激しい気候、里山に育まれた豊かな土壌と清らかな水、卓越した生産者の技術が相まって、他にない魅力を生み出し地域の特産品として親しまれていますが、残念ながらその高いポテンシャルを活かしきれていないと私は感じており、そのことが皆さんが感じる「無関心」の壁を生み出す要因の一つになっているのではないかと考えます。

このため世界各地から多くの人々が訪れた万博でのPRや、イスラム圏の皆さんにも楽しんでいただけるハラール認証を得た三田牛のPRを生産者や事業者の皆さんと共に展開してきたところですが、今後、農業や観光等、本市における様々な分野の連携による総合的なシティブランディングを展開していく必要があると考えています。そのような中、次代を担う高校生の皆さんからいただいた今回のご提案は、三田の特産物の魅力を高め、ひいては市のブランド力の向上につながるものであると考えます。

まず、「五感で感じる体験をデザインする」というご提案についてですが、地域特産物があるポテンシャルを伝えるためには、日常とは異なる体験を通じて、五感で魅力を感じ

ていただくことは、最も効果的な手法であると考えます。農村環境、生産者さんの思いに触れつつ、自らの手で収穫し、調理し味わうことにより、地域特有の魅力を生み出す背景への理解も深まり、ストーリー性と相まって参加者のみならず、企画に携わる多くの人の心にも深い愛着を育むものと大いに期待できるものです。

次に、2つ目の「学生ブランドの立ち上げ」についてですが、これまでも大学と連携したレシピ開発などの取組みは進めてまいりましたが、ご提案の中高生によるオリジナル特産品開発やそれを核としたイベント展開は前例がなく大変ユニークな企画であると感服する次第です。特に若者が率先して生産者や地域を巻き込むという視点は、「無関心」の壁を壊す大きな力にもなり得ると考えます。市では生産者の皆さまと消費者との交流を目的に古くから「さんだ農業まつり」に取り組んでいますが、こういった既存のイベントとの共催も可能性があると考えます。

今回頂戴した2つのご提案は、若者らしい視点から地域ブランドの更なる向上を目指すものであり、この三田が、皆さんのような若い世代の活躍により、若者が暮らし続けたいと希望が持てるまちとなるものと、私も大いに期待しています。

市といたしましても、地域が誇る特産物の魅力発信を通じて、とりわけ若い世代が愛着を持てるよう、皆さんと共に地域づくりを推進してまいりたいと考えますので、今後ともご協力を賜りますようお願い申し上げます。

三田西陵高等学校の高校生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

- 【提案校】 7番 三田モードビジネス専門学校
2年 杉本 翔渉（すぎもと とわ）
2年 瀬戸 七帆（せと ななほ）
2年 奥野 心結（おくの ここな）
- 【担当課】 子ども・未来部 子ども育成課
総合政策部 移住定住推進課
- 【講評者】 市長
- 【提案事項】 高校生が誰でも気軽に自分らしさを発揮できるコミュニティづくりについて
- 【提案内容】

7番 高校生議員 三田モードビジネス専門学校2年の杉本 翔渉、瀬戸 七帆、奥野心結です。

私たちからは「高校生が誰でも気軽に自分らしさを発揮できるコミュニティづくり」について提案します。

私たちは、高校生が自分の持っている能力や自分らしさを誰でも発揮できたり、いろいろな人と気軽に交流できるコミュニティが少ないと感じました。

また、高校生が主体となってイベントを企画することによって、新たなコミュニティが生まれやすくなるきっかけにもなるのではないかと思います。三田市が「高校生が誰でも気軽に自分らしさを発揮できるコミュニティづくり」をしていくまちになればいいと考えています。

今の三田市は、高校生が誰でも気軽に使えて、楽しくあつまれるコミュニティエリアが少なく、自分の能力や自分らしさを発揮し合えるコミュニティはありません。

さらに、自分の能力や自分らしさを発揮できるコミュニティがあっても、分野によっては気軽に参加できるイベントが開催されていない場合があります。そのため、高校生が気軽に使える楽しいコミュニティエリアをつくることや、コミュニティをつくるきっかけとなるイベントを企画すること、また分野を問わず誰もが気軽に自分の能力や自分らしさを発揮できるイベントを企画することが必要だと考えます。

そこで、私たちは三田市高校生文化祭を開催することを、提案したいと思います。

三田市高校生文化祭が実現することによって、それぞれのコミュニティが気軽に活躍、アピールできたり、自分の能力や自分らしさを発揮することが誰でもできるようになると思います。また、発揮しているところをみて「こんなこともできるんだ」と興味を持ってもらったり、知ってもらえる一つのきっかけにもなると思います。高校生が自分の得意分野で力を発揮することで、その能力をさらに伸ばすことができ、高校生でも活躍できる街になると思います。

他にも、高校生の場合、私立、公立の垣根を越えた交流ができることにより、新たな交友関係やコミュニティが生まれたり、多様な価値観に触れられたり、自主的な運営で主体性や協調性、市について考えるきっかけ、進路や就職についての情報交換の手段も広がると思います。

市の場合、学生のため、ひいては子どものために働ける市という好印象が持てたり、子育てUターンに繋がったり、高校生視点の意見が聞けると思います。

地域の場合、地域の企業や団体を呼ぶことで、地域の特色を知れ、地元三田市に愛着や興味をさらに持ってもらえたり、他の世代との交流にも繋がると思います。私たち若者も自分の得意分野や自分の今持っている力を発揮する形で街づくりに参加することができます。

高校生が誰でも気軽に自分らしさを発揮できるコミュニティづくりのはじめの第一歩として、三田市高校生文化祭について、提案します。

【講評内容】

三田モードビジネス専門学校の高中生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

「自分たちの手で高校生文化祭を創り上げたい」という皆さんの主体的な姿勢に、三田の未来を切り拓く大きなエネルギーを感じ、大変頼もしく思います。

現在、三田市には、まちづくり協働センターや多世代交流館「ふらっと」などの活動拠点があり、学生活動のソフト事業としては、「三田ガクチカ FES」のような、市内で活動する学生団体が一堂に会する発表の場なども開催されています。

皆さんが思い描く文化祭を新たに立ち上げるには、会場の確保や運営資金、そして来場者の安全対策など、一つひとつ乗り越えていく課題がありますが、それらを解決していくプロセスこそが、皆さんの社会で生きる力を育む貴重な経験になると確信しています。

夢を実現するための鍵は、市の制度や地域にある「人の縁」を、皆さんが主体となって巧みに活用することにあります。まず、資金面については、学生団体のまちづくり活動を上限10万円まで支援する「学生まちづくり活動費補助金」制度がありますので、ぜひ活用を検討してみてください。

そして、運営や集客の面では、三田市ゆかりの著名人や団体と連携するアプローチが極めて有効です。本市には、新たに「さんだアンバサダー」に就任されたプロ棋士の富田 誠也（とみた せいや）さんやプロダンサーのHINATA.M（ひなた）さん、さらには「ミス・スプラナショナル・ジャパン 2025」で3位に輝いた松尾 実咲（まつお みさき）さんなど、皆さんのような若者の挑戦を応援したいと考えている素晴らしい先輩たちがいます。

また、移住促進ボランティア「さんだ住まいるチーム」も心強い味方です。ここには、学生から子育て世代、起業家、農家、会社員まで多様なメンバーが集まり、どうすれば「三田愛」が伝わるか、試行錯誤しながらイベントの運営やSNS発信に取り組んでいます。

いきなり単独での開催が難しくても、既存のイベントの中に、彼らのような三田ゆかり

の先輩たちとコラボレーションした企画を皆さんがプロデュースする形であれば、実現への道はぐっと近くなります。

ぜひ、今日の提案をきっかけに、市の制度や憧れの先輩たちの力を借りて、夢への第一歩を踏み出してください。皆さんが「このまちに住み続けたい、戻ってきたい」と心から思える希望のまちを、私たちと一緒に創り上げていきましょう。

令和7年度 三田市高校生議会 提案書

【提案校】 8番 兵庫県立北摂三田高等学校
2年 大西 勇翔（おおにし ゆうと）
2年 西本 奏音（にしもと かなで）
1年 下村 紗英（しもむら さえ）

【担当課】 子ども・未来部 子ども育成課
市民生活部 文化スポーツ課

【講評者】 市長

【提案事項】 新たな地域教育を支える、放課後学習会の活性化に関する提案

【提案内容】

8番 高校生議員 兵庫県立北摂三田高等学校2年の大西 勇翔、西本 奏音、1年の下村 紗英です。

私たちからは、三田の伝統文化を認知・体験するきっかけとなる放課後学習会について提案します。私たちが小学生の時に行われていた放課後学習会に、参加したことがあります。そこでの経験は、視野が広がり、新たな知見も得られ、楽しかったこととして記憶に残っています。このような経験から放課後学習会を地域教育として活発化させることで、よりよい教育を作り出せると感じました。また、地域での交流があまり活発でないため、世代を超えた交流が活発になるような街になればいいなど考えています。

今の三田市は、伝統文化の担い手が減少しています。また、それらについての情報が届いていないと感じており、三田の伝統文化を知り、体験するきっかけを増やすことが必要であると考えます。そこで私たちは、放課後学習会の一環として、三田の伝統文化に携わっている人に協力してもらい、伝統文化を知って体験するきっかけを作ることを提案したいと思います。

具体的には、現状の放課後学習会の内容の一つとして、三田の伝統文化の学習会や体験会を開催し、地域の子どもたちがそれらに触れる機会を作ることです。ほかにも、夏休みのラジオ体操のようにスタンプカードを作成したり、交流の一環として高校生ボランティアを募集することで、より活発化させられると考えています。

そこで市には開催に当たって場の提供や金銭的な支援、伝統文化関係者への協力の呼びかけ、広報支援を求めます。

これらが実現することによって、地域の子どもたちがより多くの経験や人とのかかわりを持つことができ、世代間の交流が活発になるような街になると思いますし、私たち若者もボランティアという形で街づくりに参加することができます。世代間の交流も深まり、地域の子どもたちが三田の伝統文化を認知・体験するきっかけが生まれる放課後学習会について提案します。

【講評内容】

北摂三田高等学校の高校生議員の皆さん、ご提案ありがとうございました。

小学生の頃に体験した放課後学習会の楽しかった記憶を、次の世代にもつなぎたいという温かい思いに、深く心を動かされました。そして、その学びの場を単なる学習指導にとどめず、「地域の伝統文化」の継承へと発展させた着眼点は、大変素晴らしいものです。

ご指摘のとおり、三田市には「三田本庄百石踊り」や「三田音頭」、「三田御殿踊り」に「田楽」など、誇るべき伝統文化が数多くあります。しかし、担い手の高齢化や後継者不足は、容易には解決できない構造的な課題となっているのも事実です。

そうした状況にあるからこそ、皆さんのような若い世代の関心が、解決への一筋の光となります。市内には、地域に連綿と受け継がれた文化を支えてこられた保存会や神社の氏子の方々、三田市文化協会など、豊かな経験と知見を持つ人生の先輩たちが数多くいらっしゃいます。彼らは、これまで培ってきた思いや形を次の世代にどう伝え、残していくかに心を砕いておられますが、今、まさに皆さんのような若い感性や熱意が必要だと思います。

市として、こうした「地域の力」と高校生の皆さんを結びつけることが、課題解決の鍵になると考えています。指導者の確保や継続性など整理すべき点はありますが、既存の「放課後子ども教室」の枠組みなどを活用し、皆さんが地域の達人たちと出会い、協力し合える場を整えることに、市としても力を尽くしてまいります。

その上で、活動が実現した際には、高校生の皆さんに、専門家である大人たちと小学生の子どもたちをつなぐ「架け橋」となっていたいだきたいのです。伝統芸能の奥深い世界は、子どもたちには少し難しく感じるかもしれません。そこで、難しい所作を分かりやすく噛み砕いて伝えたり、郷土の歴史をクイズ形式にしたりと、子どもたちが自然と興味を持てるような工夫を凝らしてください。これは、柔軟な発想を持ち、子どもたちに近い目線に立てる皆さんだからこそ果たせる、大切な役割です。

地域の文化を大切に思い、自ら行動を起こそうとする皆さんの姿勢は、まちづくりの原点そのものです。その思いを持つ皆さんとともに、三田の未来を紡いでいけることを楽しみにしています。